

QOLのある風景 “ちょっとした”ところにある 患者さんの困りごとを考える

私たち医療者は、日々の診療で疾患を考え、診断し、治療することを大切にしている。血圧を下げる、血糖値を適正にする、画像所見を確認する、薬を調整する。それらはもちろん医療の重要な仕事である。一方で、診療のなかで患者さんが本当に困っていることは、検査値や病名のすぐ隣にありながら、意外なほど見えにくいことがある。

眠れない、しびれる、かゆい、夜に何度もトイレに起きる、薬を飲むのがつらい、通院そのものが負担である……など、医療者にとっては「命にかかわらないから大丈夫」と言いたくなるようなことでも、患者さんにとっては、その日一日の気分や外出、人との関わり、生きる意欲を左右することがある。quality of life(QOL)とは、まさにそうした“暮らしの質”を問い直す言葉である。

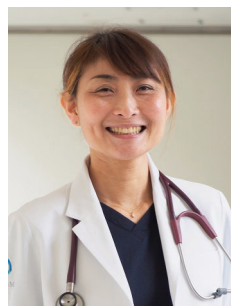
本特集では、QOLの歴史や測定の考え方から始め、“ついでに相談”によくある症状や困りごとの各論を子どもから大人についてまで議論しながら、医療者のやさしさや人工知能(AI)との関連といった最近の気になる話題、社会制度や国内外の状況、現象学、認知心理学、文化人類学、医学教育、そして患者さん自身の語りまで、多くの視点からQOLを眺めた。どの項目にも共通しているのは、QOLは単に尺度で測るものではなく、その人がどのように暮らし、何に困り、何を大切にしているのかを聴くところから始まる、ということである。

家庭医療・総合診療の現場では、患者さんの主訴の横に、まだ言葉になっていない困りごとがそっと置かれている。「お大事に」のあとに診察室のドアに手をかけ、「先生、実は……」という一言のなかに、その人のQOLを大きく変える手がかりがある

かもしれない。また、AI が医療を支える時代になっても、患者さんの沈黙や揺れる感情、怒りや悲しみ、希望に触れながら、ともに考える人間同士の営みは、これからも医療の中心にあり続けるだろう。

本特集の願いは、読者の皆さんに新しい専門用語を増やすことではない。明日の外来で、病名や数値の向こうにある患者さんの暮らしを、ほんの少しか立ち止まって見つめ直していただくことである。

QOL は特別な場面にだけあるものではない。日常診療の“ちょっとした”ところに、すでにある。患者さんの困りごとに気づき、今日より明日、もう少し優しくなれる小さなフラグとして、本特集が役立てば幸いである。



三澤美和

大阪医科薬科大学病院総合診療科